

情報・消費社会と子ども —子どもの生活世界の変容—

高橋 勝（横浜国立大学教育人間科学部教授）

（1）子どもの成育環境の変貌

①農耕型社会の名残（1945～1960）

農村共同体の中に「一人前」の村人を形成する機能が仕組まれていた。共同生活者としての子ども。田畑、家畜、自然の恩恵を実感。大自然と農村共同体（対自然・対人間関係が中心）に囲まれた子どもの生活。貧しいが未来への希望（西洋近代社会への理想）に燃えていた時期。

②工業型社会へ（1960～1980）

モノ作りと技術革新の時代。「生きることの意味」が、自然の開発、科学技術の進歩（対モノ関係）、高度経済成長、「物的に豊かな生活への欲求」に動機づけられていた時期。高校、大学進学率の向上。受験競争、追いつけ追い越せ型の近代化の時代。

③情報・消費型社会の出現（1980～現在）

メディアと消費社会の出現により、アイデンティティ、生きる意味が拡散する。未来志向の生き方が消えて、コンサマトリーな（今を生きる）生き方が広がる。自分らしさ、自己実現、自己愛の時代がはじまる。1970年代後半から、不登校、高校の中途退学者数、いじめが激増。

理想の時代→ モノの時代→ 虚構の時代（生活の苦しさ・貧しさ→ 生きる実感の希薄さ）

生きることのリアリティが感じられない社会の出現。〈生活の苦しさ〉から〈生の空しさ〉へ。

便利で楽しいが、独りぼっちで、寂しい社会の到来。子ども・青年の孤立化と、理想、夢、大人になることへの期待感の喪失。輝かしい未来の喪失。井上陽水の歌詞に見られる明るいニヒリズム。「日本には何でもある。ただ希望だけがない。」村上龍『希望の国のエクソダス』2000年

（2）「子どもが見えなくなること」の社会背景

①未来よりも現在、理想よりも実利

消費社会では、子どもも一人前の消費者、お客様として扱われる。携帯所率：小37.5%（3000円）、中76.2%（6000円）、高96.5%（8000円）

神奈川県教委、2008年2月調査。

共同生活者、働き手としての子どもの消滅。子どもには、家事労働は期待されず、勉強、塾、室内遊び（ゲーム）だけがあてがわれる。便利で快適な消費社会の到来。未来に向かい、理想や夢をもって黙々と努力する必要がなくなる。いま現在を楽しむ consummatory な子ども。「灰色の受験生活」は昔の話。学ぶ意味、生きる意味

を未来に求めるのではなく、いま現在をエンジョイする。

メカニズムと消費行動にはめっぽう強いが、「理想を持つことと対人関係」が苦手な現代の子ども。

②自己愛が強くデリケートで傷つきやすい子ども

かつて学校は①自発性の教育、②学力形成（教科指導）③集団形成（道徳、特別活動）で十分だった。1945年～1970年代末までは、教師が最も輝いて、授業に専念できた時期。

しかし、1980年代から、子どもの対人関係が崩れ、デリケートで傷つきやすい子どもが学校に来るようになった。集団生活が苦手、自己中心性と自己愛傾向の強い子どもの登場。親子ともに消費者感覚が強くなる。

デリケートで傷つきやすい子ども＝社会的訓練の場を喪失した消費社会に特有の産物。学校は、子どもの社会性をゼロ地点から育成しなければならなくなった。

③二極化する子どもの世界

格差社会の広がりに伴って、情報量が多く、生活経も豊富な子どもと、情報量が狭く、教師にも「所属と承認の欲求」（基礎的な存在欲求、A.マズロー）を求める子どもの2種類が入ってくる。親の社会的、文化的格差が、子どもの学習への意欲格差を生み出す傾向が強まる。

→ 山田昌弘『希望格差社会』筑摩書房、2004年／三浦展『下流社会』光文社、2005年

有名私立中学への受験をめざして、早くから学習塾通いをする子どもと、未来に希望をもたず、今を楽しむ消費社会の落とし子たちが、同じ学級で学ぶという現実。指導の難しさ。

（3）欠乏動機と成長動機

高次の成長動機

⑤自己実現欲求

基礎的な欠乏動機

④尊敬欲求

③所属と愛情（承認）欲求

②安全欲求

①生理的欲求

成長動機に溢れている子どもは、家庭の文化資本が高く、基礎的な欠乏動機に縛られることがない。しかし、家庭に問題があり、欠乏動機の次元が十分充足されず、「所属と愛情（承認）欲求」に飢えている子どもは、つねに不安を抱え、学習に安定的に取り組むことができない。家庭の問題が、学校に大きな影響を及ぼす。（A. H.マズロー『完全なる人間』誠信書房）

①情報・消費の波に洗われやすい家族、防波堤の役割を果たす家族

「自発的な個人」とは、家庭でも、学校でも、欠乏動機が十分に満たされ、愛情のネットワークにしっかり支えられている子ども。食生活で四季のサイクルを実感できる家庭は、文化資本が高い。家族が崩壊するか、親が仕事に忙しく「所属と愛情（承認）欲求」を十分満たさず、しかも子どもに業績原理で接するならば、子どもの情緒は安定の基盤を失う。秋葉原通り魔殺人事件の容疑者はその典型？ 学校は、学力、技能、社会性という諸能力を子どもに養成する機関であるが、近年は、さら

に子どもの①生理的欲求、②安全欲求、③所属と愛情（承認）欲求をも十分に満たすこと（＝子どもの居場所）が要求されるようになった。情報・消費社会の浸透により、弱体化した家庭、地域社会の教育力の補完機能をも学校で行わざるを得ない現実。

（４）他者とかかわる生活者としての子どもの育ち

①二人称で考える思考の習慣

「わたしーあなた」という対話的關係づくりが大切。三人称「わたしーそれ」「わたしー彼／彼女」ではない。問題を第三者的に傍観するのではない。友だちが受けているいじめを傍観する子ども。ON／OFの操作で（つまり自分の都合で）他者とながら現代社会。しかし、身近な誰かと「心からつながりたい」という欲求（所属と愛情欲求）をかき消すことはできない。家族、学校、地域社会のどこでも、「わたしーあなた」という二人称（固有名）の対話的思考の習慣づくりが必要。

②「はいまわる経験主義」を再評価する

植物栽培、動物の飼育、地域の商店街マップ作りなど、子どもが動植物、他者、地域の人々と関わり合い、働くこと、学ぶこと、生きることを意味を、実感的につかみ取ることが大切。

最短距離をムダなく走る効率的学習以前に、子どもには沢山の試行錯誤、経験、迂回路、道草を用意しておくことが大切。自発性は、そうした一見ムダに見える経験をくぐる中からこそ育つもの。最短距離を走る学習（尊敬欲求）からは、自発的独創的な学習（自己実現欲求）は生まれない。学校生活の全体を、他者、植物、動物との関わり合いや試行錯誤、失敗、チャレンジ、冒険心に満ちた活動空間として再構成すること。→「経験の空間としての学校」（H.von Hentig）

③子どものチャレンジ精神、冒険心を育てる学校

学校は、家族の（「所属と愛情（承認）欲求」の充足という）協力と理解を得ながら、崩壊した地域社会を新しいかたちで再生させる拠点となるべきであり、子どもが生活者として自立し、未来に向かってチャレンジ精神をもって生きていく力を育てる場所になるべきである。

□ 詳細については、以下の拙著をご参照下さい。

『経験のメタモルフォーゼ——〈自己変成〉の教育人間学』（勁草書房）、『情報・消費社会と子ども』（明治図書）、『文化変容のなかの子ども——経験・他者・関係性』（東信堂）、『子どもの自己形成空間』、『学校のパラダイム転換』、『子どもの〈暮らし〉の社会史』、『教育関係論の現在』（以上、川島書店）、『作業学校の理論』（明治図書）、『教育人間学入門』（監訳、玉川大学出版部）など。